



ご 挨拶

第61回全日本特別支援教育研究連盟全国大会 秋田大会実行委員長 菊 田 靖

令和4年度、第61回全日本特別支援教育研究連盟全国大会秋田大会を開催できますことを関係の皆様にご感謝申し上げます、ともに喜びたいと思います。ご承知の通り、新型コロナウイルスによる甚大な影響を受け、本大会においても2年間にわたって、全国の会員が一堂に会する貴重な機会が失われてしまいました。しかし今年は、参集型の大会への復帰の道筋をさぐりながら準備を進めてまいりました。

コロナ禍以降、世間一般において従来の活動方法に替えて、オンラインによる会議や業務、文書による発表や報告、web会議やオンデマンドでの動画配信による連携や提案など様々な手法が一般的となりました。人々が参集することなく交流する方法が新たに加わったといえます。しかし、総合的に最も優れているのは、やはり直接同じ空間で対面し、生き生きと言葉を交わし、豊かな表情とともに思いをやりとりすることだということが明らかになったともいえます。このことは特別支援教育の根幹にも通ずるように思います。一人一人への支援が、真にその子どもに届き成長を促すものとなるためには、直接のふれあいや観察が欠かせません。きめ細かに適性を感じ取り、支援の在り方を探り、効果を確かめながら接していくことが大切です。

また、通常の学級において支援を必要としている児童が少なくないと言われ、年々増えているのではないかという声があります。しかしおそらく、数が増えたとか減ったとかそうした単純な見方では、正しく今の学校現場を解釈できるとはいえません。もしかしたら、変わったのは子どもではなく、社会の方かもしれません。社会が求める人物像や必要な能力、逆に言うと社会が気にかかる人物像や必ずしも重要としていない能力の方が、移り変わっていると捉えることはできないでしょうか。わずか数十年前は家庭や学校、地域が当たり前を受け止めていた事柄を、近年は受け止めがたいものと認識するようになったのかもしれませんが、複雑化、多様化した社会は、好ましい物事として捉える範疇が狭く小さくなっている印象もあります。

今回の学習指導要領改訂にあたり「予測が困難な時代」が、キーワードとなりました。その具体の一つが「社会がどういう人物を求めているのか」ということだと思います。私達はその答えを探りながら、子どもたちが「夢や志をもち、自ら未来を切り拓く」ことができるよう育てていかななくてはなりません。「自立と社会参加」は、変容を続ける社会の姿をその都度丁寧に見極め続けることによって、はじめて成し遂げられていくに違いありません。

今回、集録に収められた貴重な実践発表は、全国各地の特別支援教育に携わる同士にとって教育実践の貴重な示唆となり、一部あるいは全部が再現され検証されることでしょう。各地において、直接実践が行われることは、本大会の願いでもあります。本大会の再開にあたり、準備に多くの労を注いでくださった皆様、関係する皆様にご心からの感謝と拍手を送り、挨拶といたします。